



船乗り文化について考えてみる

★小さなロビー展
三月二日から二〇日まで「せとうち交流館」(上島町弓削)
ロビーで「船乗りの島・弓削島」展を開催している。町内にあるNPO法人「頼れるふるさとネット」の主催。実は三年前、同じく弓削島の

松原海水浴場の呼び名の元になつた松原(法王ヶ原)で、福山市の写真家村上宏治氏主催の屋外写真展を共催した。それは同法人が、架橋によつて生名島(弓削島)間が途切れていた尾道直行便の復活に助力し、その集客の一環として催行したものでもあつた。

そのとき南北洋捕鯨のパネルが展出されていて、そのパネルをNPOで預かり保管していた。それを中心に商業捕鯨当時の捕鯨船乗組の状況がわかる物の一部を展示したものである。現在調査捕鯨を実施している共同船舶株式会社さんから寄贈されたクジラのポスター等も併せ展示させてもらった。

●千尋の谷を飛んだ先人達

弓削島には明治の後期(三四〇年)、岩城村と協働して創立した現・国立商船高専がある。その元は弓削村外一ヶ村立学校合の海員学校で県立・国立へと発展を遂げてきた。瀬戸内海の小島の村で村立海員学校を持つなどと言うのは途方もない挑戦。が、村長以下の議会、あるいはすでに功成り名を遂げていた村の出身海員達の、次世代の若者たちに稼げる教育を施すしか村の未来は無いとの、熱烈な活動のたまものであつたろう。学校は村の光、村の未来。時代の国策とも合致した。

弓削商船学校は高級船員(士官)養成を目指した。それは村出身で船員になり、粒々辛苦のええ船長や機関長、船首になつた人々の、下積み時代の労苦から導き出された選択肢だった。

■辛酸なめて他者に尽くす

写真を見る
南北洋捕鯨のありさま
商業捕鯨時代
場所:せとうち交流館ロビー
会期:平成26年3月2日(日)~3月20日(木)
午前8時30分~午後5時(最終日は正午まで)
主催:NPO法人 頼れるふるさとネット



弓削島は船乗りの島。かつて海のおとこ達は、かく闘った



その一方、生名島出身の濱田太郎は、一二才(一説には一六才とも)から船員生活の末、一般船員とか部員と呼ばれていた過酷な現場のたたき上げ船員の待遇改善に、経営者と対等に交渉できる組合の創立や、その運用に身命を賭した。

今日の全日本海員組合の礎を築いたその人物のことは昨年の本紙9月号でも紹介した。船は、それを動かすのに多くの人手が要つた時代に、縁の下の力持ちに正当な報酬・待遇を、というのは、今までこそ当たり前にみえるが当時は弾圧の対象にすらなつた。その活動が陽の目をみたのは、圧倒的に多い下級船員の人々の支持があつたからにはなるまい。その上でそれらの人々の家族を養うに途方もない貢献をしたはずである。

▼船乗りの文化の痕跡を探る
時代が変わり、船の運航コストを下げるため船会社は様々な手段を講じてきた結果、ついに

きどぐち 四六

青木喜代子



一月はいぬる。二月は逃げる。
三月は去ると、昔の人はうまく言つたもので、もう三月。

台所に大きな日めくりがある。毎朝勢いよくめくるのが私の日課。左端に本日の一言として「仕え」、本日は不成就日。先負、学問裁縫は吉。契約縁談、積極的な行動は悪日、とある。朝からテレシヨンが下がる。それでも素直に従う日もある。造作新規事は大凶、などある日は「おお、せっかく片付けをしてふくらませてゆければ、我々の過去が見え、未来も見えてくるにちがいありません。どうかご見学の上ご意見頂ければ幸甚です。」(平山和昭)

着初めは大吉とある。着ていきましよう」と、すっかり腕を通して夫は日めくりを読む。早い話がいいとこどりの不信心。実家の母は、新しい日めくりをする。今年の三百枚余りの日めくり。毎日新しい朝を迎える事に感謝しつつ、めくりますかね。

「もう選曆もすぎたのに、気持ちだけいいから」と心にもなく辞退すると「私が元気なうちに絶けさせて」とありがたいお言葉。もちろん素直にいただきます。私は三月末。もうすぐです。

赤いペンで書き込むのが暮れの仕事。その日が近づくと、冬ならコタツのテーブルの下、夏は事務机の鍵のかかる引き出しに封を用意している。総勢一五人分。二月生まれの夫と息子はすでに終わっている。それぞれメッセージを書いた金封。春のライブ・ゆげ

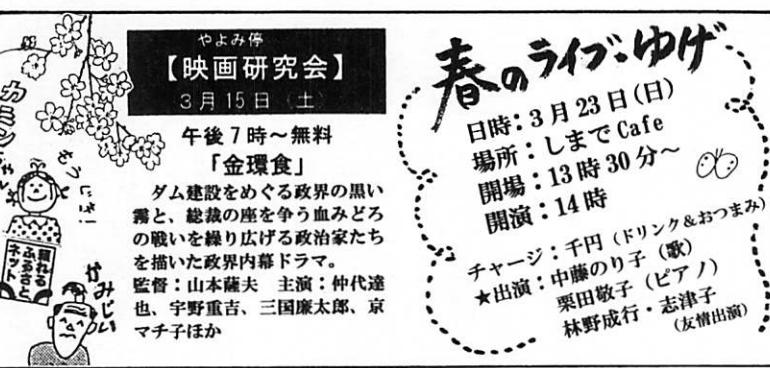
やよみ停 映画研究会

3月15日(土)

午後7時~無料

「金環食」

ダム建設をめぐる政界の黒い霧と、総裁の座を争う血みどろの競いを繰り広げる政治家たちを描いた政界内幕ドラマ。監督:山本薩夫 主演:仲代達也、宇野重吉、三国康太郎、京マチ子ほか



おひらせ



美しい日本の風景

平木コレクション

平成26年3月15日(土)～5月11日(日)
 休館日 3月5日(月・祝は開館) 4月14日(月)
 会期中・制作品販売を行ないます
 【前回3月15日～4月13日】(後期)4月15日～5月11日

尾道市立美術館
ONOMICHI CITY MUSEUM OF ART

川瀬巴水、吉田博を中心

伊方原発3号機は、よりいつそう危険なブルサーマルを行つてゐる原発でもあります。福島第1原発は「収束」するどころか大量の放射性汚染水が海に流出し、深刻化して、原発の再稼働は許されません。以上の趣旨にからんがみ伊方原発の再稼働を認めないことを強く要望し、地方自治法第99条の規定により意見書を提出します。

平成25年9月20日 上島町議会

伊方原発3号機は、よりいつそう危険なブルサーマルを行つてゐる原発でもあります。福島第1原発は「収束」するどころか大量の放射性汚染水が海に流出し、深刻化して、原発の再稼働は許されません。以上の趣旨にからんがみ伊方原発の再稼働を認めないことを強く要望し、地方自治法第99条の規定により意見書を提出します。

上島町議会主催講演会 (無料)

議員活動録

(15) 議會議員 平山和昭

平成26年3月17日

上島町議会主催講演会
「未来を担う子ども達の為に、今、私たちに出来ること」
～フクシマ惨事から3年、伊方原発の危険性～



講演者紹介

Aimee L. Tsujimoto (エイミー・ツジモト)

- ・米国ワシントン州生まれ日系四世。曾祖母が岩城島出身。国際フリーランス・ジャーナリスト。
- ・日本ペンクラブ会員。米国在住。
- ・ハレン・カルディコット財団日本代表。
- ・日本人移民、日系人の記事を多数執筆。著書にオーストラリア・フェザーストーン捕虜収容所の暴動事件を扱った「消えた遺骨」(2005年)
- ・3・11後、各紙上で「フクシマ原発事故」に関する記事を執筆し「内部被曝」に関する危険性の情報発信を展開。
- ・平成25年上島町9月定例議会で「伊方原発の再稼働を認めない事を求める」意見書を可決、安倍首相に送った事を目にとめロイター通信を通じ欧米に発信され話題になりました。

愛媛県では伊予市、鬼北町、上島町が伊方原発再稼働反対の意見書を採択しているところでありますが、四国全体では再稼働反対の意見書採択が三分の一を超えていて、全国的に見ると、原発の半径30キロ圏内にある156自治体では原発再稼働容認は2割との報道もあります。

政府は、福島第一原子力発電所事故の真の原因究明も出来て斜しています。特定秘密保護法の成立とともに、国民への情報がますます遠のくことがとても心配です。意見書の全文は以下通りです。

新規基準は、福島第1原発事故の原因究明も終わらないもとで、教訓を踏まえたものとはいえず、安全を確保出来る保証ではなく、世界有数の地震国・日本には原発の立地可能な地域などありません。まして伊方原発の6キロ先には日本最大の活断層・中央構造線があり、東海・東南海・南海の「同時発生」などありません。

防災計画も確立していません。伊方原発は、閉鎖性海域である瀬戸内海に面しており、ひとたび伊方原発で過酷事故が起これば、四国・中国・九州全域に大規模な放射能汚染が広がるとともに、瀬戸内海が重大な汚染を受けることは明らかです。

未来にならう子ども達のために

今、私たちができること

●原発再稼働反対の意見書

（伊方原発の再稼働を認めないことを求める意見書）

りんさんと島渡



〔3〕

野原フミ

あるとき、「マンタがおるの知つとるか」と祖父に聞かれて、それなら知つてゐる

父に聞かれて、「この海にもおるぞ」

「エ！」でも潜らないとでしょ

よ」と、明日海。

「この海にもおるぞ」

「いいや、歩いて満潮の海面を真上からのぞきに行くんじや」

「つか寒い頃、祖母も一緒にカキを打ちに行つた浜です。それは干潮の朝でしたが今度は満潮の時間です。はしごで登る高い一文字堤防の上から、のぞいてマンタが現れるのを待ちました。この堤防の壁は垂直で、満潮の海面の位置までびっしりカキ殻がついています。しばらくして本当にマンタがやってきました。

四角くてその一角に長い尾がある、たこ揚げの

たこのようです。タタミ半分ぐらいかもと大きいかもしれません。尾が同じくらい長いのです。マンタは口を勢いよく壁に当てて後ずさります。すると、くだけた貝の白がパツと紙吹雪のよう散つて海中に沈んでいきました。そしてまたひと回りして壁にもどつてくるをくり返すのです。

よく見ると、どうも二匹がかわるがわる寄つてきているのがわかりました。ゆつたりひるがえつて、おどるような姿で二匹きが出会うと明日海は拍手しました。オツと足もとの狭いのを忘れずにいなければ。

なおじつのぞいていたら、マンタの四角と

ちょっと違うものが一緒にたわむれています。

「このあたりにはデゴンがおるからのう」

つて。イルカの一種らしいのです。

大きな魚の尾のような三角がキラつと光つて

寄つたり離れたりしているのです。それを祖父

に言つたら

「それとも、物語にててくる人魚ではないかといわれるジユゴンかもしけんぞ」と、首をかし

げて愉快そうに言いました。

ジユゴン、それは尾が光つてゐるのだろうか、

虹色に光つてゐるだろうか。明日海に疑問符が

残りました。

（つづく）